平和をたずねて

広岩 近広

京都の東山は著名な社寺が多く、四季を通して観光客がたえない。京女の愛称で呼ばれる京都女子大は、ここ東山にある。来年、創立100年を迎える。

米軍のB29による空襲を受けたとき、京女は京都女子専門学校だった。1945（昭和20）年1月16日、投弾のひとつが京都女専の第三小松寮を直撃した。木造2階建ての寮は倒壊し、1階に寝ていた5人が生き埋めになった。深夜の救出作業の末、幸運にも全員が助け出された。

その一人、2年生で18歳だった酒井清子さん(83)は神戸市内の自宅で追想するのだった。

「耳が割れるほど強い音がした瞬間、指先ひとつ動かすことができなくなりました。そんな状態で暗闇の世界に閉じこめられているうちに、私は生き埋めに遭ったのだと……」

死を意識したのは、何かが焦げるにおいに気づいたときだった。「炎が近づいているとわかっても、身動きできません。ここで焼け死ぬかもしれない、でも死にたくない……と痛切に思っていると、おかあちゃんと泣く声が聞こえてきました。友だちも生き埋めになっていたのです。家族の顔がうかび、私も泣き出してしまいました」

どのくらい時間がたったろうか。今度は別の声を聞いた。「誰かおるか」「生きてるか」。酒井さんは「生きています！」と地中から声を振り絞った。

酒井さんは振り返る。「男の人たちによって引きあげられたのですが、こわばった体はくの字に曲がったままでした。その状態で担架で運ばれました」

酒井さんら5人が助かったのは、小さな勉強机を頭のそばに置いて寝る習慣があったからだという。「壁や家具が倒れても、机に頭を守られるのです。実際、祖父の形見の文机が、私を守ってくれました」

酒井さんは真顔で続けた。「どうにか元気になったとき、生徒監の先生が見えられて、厳しく言われたものです。このことは誰にも話してはならない、両親にも話してはいけない。もちろん黙っていました。そんな時代でしたから」

京都空襲 古都が震えた日❹ 情報統制で周知度低く

酒井さんの証言から情報統制がうかがわれる。

「デマをとばすな」「デマにまような」「流言は敵の謀略だ」といったビラが京都市内に張り出されたそうだ。こうした口止めは、京都空襲にかぎらず日本列島の津々浦々で行われていた。

いずれにせよ京都空襲の周知度は低かった。このため京都府立総合資料館と市民団体「京都空襲を記録する会」が73年から調査に乗り出す。この結果、東山空襲は死者41人、負傷者48人、被害家屋316戸にのぼることがわかった。労苦は「かくされていた空襲」（汐文社）にまとめられた。

私はそこに載った体験記「実態を伝えなかったラジオ、新聞」の一文に痛撃された。〈ふしぎなことは、ラジオも新聞もなりをひそめてしまったことだった〉

戦争はあってはならない。ふしぎなこともあってはならない。自戒の一文であった。

（次回は22日に掲載）

生き埋めから生還し、家庭科の教師になった酒井さん。愛用の織機を手に東山空襲を語る